

## 第1回新たな博物館、美術館に関する基本構想懇談会 会議録（摘録）

- 1 日 時 令和4年5月31日（火） 午後3時00分～5時00分
- 2 場 所 川崎市役所第3庁舎18階講堂
- 3 出席者
  - (1) 委員 稲庭委員、垣内委員、齋藤委員、高野委員、田中委員、西川委員、保坂委員、八木橋委員  
※垣内委員、西川委員はテレビ会議システムによる参加
  - (2) 事務局 市民文化局：中村局長  
市民文化局市民文化振興室：白井室長、小沢担当部長、植木担当係長、  
功刀職員  
川崎市市民ミュージアム：井上担当課長、磯崎担当課長、立石職員
  - (3) 関係者 株式会社トータルメディア開発研究所：佐藤氏、松山氏、水間氏
- 4 次 第
  - 1 開会
  - 2 懇談会概要、委員紹介
  - 3 「新たな博物館、美術館に関する基本的な考え方」について
  - 4 意見交換
    - (1) 新たな博物館、美術館の「使命」及び「めざす姿」の草案について
    - (2) 新たな博物館、美術館の「融合」について
  - 5 その他
  - 6 閉会
- 5 公開・非公開の別 公開
- 6 傍聴者 1名

### （次第一） 開会

事務局

第1回新たな博物館、美術館に関する基本構想懇談会を始めさせていただきます。本日は、お忙しい中ご出席いただきましてありがとうございます。私は本日の懇談会の進行を務めさせていただきます川崎市市民文化局市民文化振興室担当部長の小沢でございます。どうぞよろしくお願いたします。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、様々な対応をさせていただいてお

りますが、スムーズな会議進行にご理解とご協力をお願いしたいと思います。

当懇談会は、「川崎市審議会等の公開に関する条例」によりまして、個人情報に関わる事項を除き公開が原則となっております。本日は、原則非公開にあたる事項は扱いませんので、公開となりますことをご承知願います。なお、本日傍聴者は1名でございますので、ご了承ください。

続きまして、本日の会議録でございますが、「要約方式」により摘録として作成することとさせていただきたいと存じます。また、会議録につきましては、「川崎市審議会等の会議の公開に関する条例施行規則」第5条第2項の規定により、審議会等で指定された者の確認を得ることとされておりますので、当会議録におきましては、全ての委員により確認するものとさせていただきたく存じます。なお、後日公開いたします会議録におきまして、発言した委員のお名前も公開の対象となりますので、ご承知おきいただきたく存じます。併せまして、本日は、報道各社が取材されることになっております。本日の会議内容等について報道される場合もございますので、ご了承願います。

それでは、会議に先立ちまして、お手元の資料の確認をさせていただきます。本日の次第に続きまして、【資料1】がA4で2ページ、【資料2-1】がA3で2ページ、【資料2-2】がA3で2ページ、【資料3】がA3で1ページとなっており、机の上に配布しております。また、それ以外に、市政要覧などの資料を配布させていただいておりますので、どうぞよろしくお願います。資料に不備などございましたら会議の途中でも構いませんので、事務局までお申し出くださいますようお願い申し上げます。

続きまして、会議の開催に当たり、中村市民文化局長からご挨拶を申し上げます。中村局長、よろしくお願いたします。

中村局長

皆様こんにちは。川崎市市民文化局長の中村でございます。どうぞよろしくお願いたします。この度はお忙しいところ新たな博物館、美術館に関する基本構想懇談会の委員をお引き受けいただきまして、誠にありがとうございます。

皆様ご存知のように、川崎市市民ミュージアムが令和元年東日本台風により被災したことなどを受けまして、「川崎市文化芸術振興会議市民ミュージアムあり方検討部会」のお力添えをいただきながら、昨年の11月に「新たな博物館、美術館に関する基本的な考え方」を策定いたしまして、本市における博物館、美術館の必要性や新たな博物館、美術館の役割やその方向性についてお示したところでございます。

今回策定を進めていこうと考えております「基本構想」ですが、「基本的な考え方」の内容を踏まえまして、新たな博物館、美術館の活動の根幹となる「使命」や

「めざす姿」を始め、次の計画段階となる「基本計画」の策定に向けた「事業展開の方向性」等について整理して、示してまいりたいと考えております。

有識者委員の皆様におかれましては、それぞれの専門的な分野からご参画いただいているわけですが、是非その専門分野の知見をもとにご意見を賜りますようお願いしたいと思っておりますし、公募の2人の市民の方にも参画していただいておりますが、市民としての目線から川崎らしさとは何か、これからの川崎のまちにとってどういう施設が本当に必要なのか等、率直なご意見を賜りたく存じます。皆様方のお力添えをいただきまして、実りある議論を進めながら基本構想策定に向けて取り組んでまいりたいと考えてございます。

最後になりますが、委員の皆様には改めて深く感謝を申し上げるとともに、委員の皆様の間達な議論から、この川崎のまちにとって、市民にとって意義のある新たな施設が実現し、さらに本市の文化行政にも盛り上がりを見せるように祈念し、略儀ではございますがご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局

(事務局担当者の紹介)

## (次第一 2) 懇談会概要、委員紹介

事務局

それでは、会議に移らせていただきます。次第に沿って進めさせていただきます。まず、次第2の「懇談会概要、委員紹介」ですが、お手元の【資料1】「新たな博物館、美術館に関する基本構想懇談会について」をご覧ください。

(【資料1】について説明)

次に、委員の皆さまのご紹介に移らせていただきます。お手元の資料の2ページに委員名簿がございます。名簿順にお名前をお呼びさせていただきますので、お1人1～2分程度で簡単に自己紹介をお願いいたします。

まず、稲庭委員よりよろしくお願いいたします。

稲庭委員

ご紹介いただきました稲庭です。この4月から東京にあります国立美術館で主任研究員として着任しております。その以前は、東京都美術館でアートコミュニケーション事業を担当してまいりました。美術館における市民とのコミュニケーションデザインなどを主な専門としております。よろしくお願いいたします。

事務局

ありがとうございました。次に、垣内委員お願いいたします。

垣内委員

政策研究大学院大学の垣内と申します。私は、文化政策を専門としております。

また、川崎市の文化芸術振興会議にも参加させていただいております。「新たな博物館、美術館に関する基本的な考え方」を取りまとめる議論にも参加させていただいております。今回は、委員の一人として今後のあり方について思うところを述べさせていただこうと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局

ありがとうございました。次の佐藤委員でございますが、本日所用で欠席になっておりますので、略歴のみご紹介させていただきます。佐藤委員は日本大学工学部教授、八戸市美術館館長ということで、建築計画や芸術文化施設の専門家でございます。それでは、続きまして、高野委員お願いいたします。

高野委員

高野明彦と申します。国立情報学研究所を今年の3月で定年退職し、今は名誉教授と特任ポストで少し延長しています。これまで文化庁と共同で文化遺産オンラインという博物館、美術館のポータルサイトを構築運営してきました。また、ここ10年ぐらいは、内閣府と国立国会図書館等を中心とする活動として、全国の博物館、美術館、図書館、公文書館などの文化施設のどこにどういうデータがあるかがすぐにわかるジャパンサーチというサービスを作ってきました。私自身はデジタルアーカイブを情報技術的な立場から応用するという研究をしております。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局

ありがとうございました。それでは、田中委員お願いいたします。

田中委員

田中友章と申します。明治大学の工学部の建築学科で教授をしております。どうぞよろしくお願いいたします。明治大学は、4つのキャンパスがありまして、そのうちの1つの多摩区にある生田キャンパスに研究室があり、建築の計画・設計、まちづくり等の研究と教育を行っております。また、私は、川崎市民でもございまして、川崎市の幸区で育ち、今は多摩区に住んでおります。ですから非常に長い期間、多摩川流域で暮らしてきており、高津区で展開している気候変動適応策等に関わる取組にも参加させていただいております。そういう面も踏まえ、ご意見を申し上げられればと思っております。よろしく申し上げます。

事務局

ありがとうございました。それでは、西川委員お願いいたします。

#### 西川委員

改めましてこんにちは。中央大学の西川と申します。私は、大学の方では日本中世史を専攻していきまして、併せて博物館の学芸員の資格課程を担当させてもらっています。もともと神奈川県出身でして、学生時代は川崎市を通りまして通学していたということで、思い出に残っています。前職は、山梨県で学芸員をしておりまして、これまでに山梨県立博物館と県立の富士山世界遺産センターの建設と運営、また、富士山の世界遺産登録について携わってまいりました。こうした経験を何かお役に立てられればよろしいかなと思っております。本日、学校の都合で途中退席させていただきますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

#### 事務局

ありがとうございました。それでは、八木橋委員お願いいたします。

#### 八木橋委員

八木橋伸浩と申します。玉川大学に所属しておりまして、リベラルアーツ学部というあまり耳慣れない学部が所属先です。いわゆる文理融合型のリベラルアーツ型教育を最初に名乗った学部です。専門は民俗学で、民俗系の博物館関係の仕事をさせていただいております。大学では博物館学を担当しております。現在、川崎市の文化財審議会の委員もさせていただいているので、今回の川崎市市民ミュージアムの浸水被害に伴う被災収蔵品のレスキュー活動については本当に心を痛めていたところございまして、資料の現状確認のために何回か伺って拝見をしているような状況でございます。とにかく、早く復旧して、うまくレスキューが叶えばいいと、保存科学は専門ではありませんが、これがいかに必要なのかということを変えて感じているところです。少しでも民俗的な部分でお役に立てるなら嬉しいなと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

#### 事務局

ありがとうございました。それでは、齋藤委員お願いします。

#### 齋藤委員

はじめまして、公募市民の齋藤と申します。普段は、SNS運用や広告企画、ウェブ漫画の監督や脚本等、表現活動に多く参加しております。このような貴重な機会に参加できたことをとても光栄に思っております。自分自身としてもこの機会に色々勉強できたかなと思っております。また、市民代表としても意見を述べられたらと思っておりますので、よろしくお願い致します。

#### 事務局

ありがとうございました。それでは、保坂委員お願いします。

#### 保坂委員

はじめまして、保坂陽子と申します。私は、一般企業を早期退職した後、大学で学芸員資格を取得しました。市民ミュージアムには勉強中にも見学に伺っていて、

その後も被災収蔵品のレスキュー活動を公開しているのを、興味をもって見学していました。新たな博物館、美術館の開館はまだまだ先になるかと思いますが、市民の1人としてとても楽しみにしておりますので、今回委員にさせていただいたことをとても嬉しく思います。どうぞよろしくお願いします。

#### 事務局

委員の皆様ありがとうございました。なお、本日は西川委員が途中で退席されますので、先にご意見を賜りたいと思います。本日の意見聴取の内容は、次第のとおり、新たな博物館、美術館の使命、めざす姿の草案と新たな博物館、美術館の融合についてです。全体の資料説明前で恐縮ではございますが、事前にお送りした資料をお目通しいただいているかと存じますので、ご意見をいただきたいと思います。西川委員お願いいたします。

#### 西川委員

はい、まだ説明をお伺いしてないので、誤解をしている部分がありましたら、ご了承くださいければと思います。

全体的に拝見した印象は、これまでのヒアリングやパブリックコメントを汲み取った形で整理され、大変わかりやすい資料を作成されていらっしゃるとお見受けいたしました。【資料3】「新たな博物館、美術館の「使命」及び「めざす姿」の草案について」を中心にまとめられていると思うのですが、【資料2-2】「新たな博物館、美術館に関する基本的な考え方（概要版）」がその前提になっていると思いますので、まずはそちらからお話しさせていただきます。

「新たな博物館、美術館に関する基本的な考え方（概要版）」では、役割1で「川崎の歴史と文化を未来へつなぐ」、「都市川崎の歴史と文化を記録し、現在を起点に過去を余すことなく振り返り、未来へと継承していく」と述べられています。ヒアリングの結果、「市民に身近な博物館になってほしい」等のご意見があったということで、これは方向性2にもある令和元年東日本台風による被害等も今回のきっかけになっていることを踏まえたと、これからは襲ってくるであろう自然災害等、川崎市の歴史や文化に関するリアルタイムなものを含めて、継承していくべき資料や情報を市民参画で記録し、受け伝え、守り伝えていく。そのあたりに踏み込んでいってもよろしいのではないかなと考えました。

それから役割2ですが、「文化芸術的な視点からの人材育成と学びの機会の提供」ということで、ここはどちらかというと美術館の方向性を踏まえた形になっているのかもしれませんが、創作活動や表現活動ができる環境をつくる、文化芸術を楽しむ体験できる場を創出する等のことが書かれています。こうした点について、同じく先ほどの「市民に身近な・・・」というところを踏まえたと、美術館に限らず歴史の側面についても、現在もこれからは起こるであろう災害や市内の出来事について記録し、展示していく。そして、それをみんなで共有しあったり、共創し

たり、そういう考え方をこれからの博物館の整備に含めていく必要があるのではないかと考えました。資料で述べている「交流を促進する」ということを前提にして、そこから一歩進み、ただ交流するだけではなく、その交流を踏まえて市民と川崎の課題について共有しあい、そこから新しく立ち上げて、作り上げていく。それが展示として形になるものかもしれませんが、今までは博物館のスタッフの方を中心に作ってきたものに、市民の方が参画して展示を作っていく。そして、自分たちで調べて研究した成果を形で表して残し、伝えていく。これからの博物館ということであれば、「共有」、「共創」という、一歩踏み込んだ要素を入れていくことも一つの考え方ではないかと思ったところです。

それから、役割3、これは「文化芸術を活用したまちづくり」ということで、資料には地域社会的課題に向き合うということも書かれています。ヒアリング等でも川崎らしさの追求等について触れられていたと思うのですが、要は市がこれから抱えていくであろう様々な課題について、歴史や文化や芸術という側面からどのように向き合っていくかということ、この役割3に持たせている。一部の関心が高い方に向けたものだけではなく、市の様々な計画や課題解決に向けて歴史や文化の側面から取り組んでいく、そのような役割を持たせていくことが市民に寄り添った博物館となるためには重要な要素になってくるのではないかと考えました。

これらを踏まえて、【資料3】において新たな博物館、美術館の「使命」及び「めざす姿」を示しているのですが、「使命」と「めざす姿」の区別があまり明確に分かれていなかったと感じました。何れも、これからの目標が書かれているような印象を受けたのですが、この「使命」がまさに目標、どういう博物館をめざすのか、どういう美術館をめざすのか、となっているのに対して、この「めざす姿」は「使命を果たすための道標」となっています。ですから、この道標が「めざす姿」という意味ですと、もう少し具体的に踏み込んで、「使命」を実現させるためにどういう取組をしていくのかを書いていかないと、「使命」を実現するために何が必要なのかははっきりと位置づけられないのではないかとお見受けしました。

また、博物館と美術館に分けて「使命」、「めざす姿」を整理していますが、例えば博物館の使命1で「川崎の魅力を広く市民とわかち合う」とありますが、博物館のめざす姿1、「誰もが身近に感じられる博物館」は漠然としたものになっているので、「使命」と「めざす姿」をつなげながら、「めざす姿」を「使命」を実現するためのプロセスと考えることにすると、例えば、この「めざす姿」のところ、川崎の魅力を市民と分かち合うために、博物館のスタッフと市民の方との共働も進めて、そしてその活動を展示として紹介していく、そういった具体的な取組とともに「誰もが身近に感じられる博物館」という内容に触れられていく方が、基本構想、基本計画の策定には必要ではないかとお見受けしたところです。

それから、博物館のめざす姿2、「人とまちを育み、未来につなげる博物館」について、「様々な交流や新たなコミュニティが生まれる」とありますが、どのような交流なのかを挙げていくことも必要になるでしょう。また、博物館のめざす姿3、「過去・現在を活かし、新たな社会（地域）を創造する博物館」では、新たなアイディアの発見の場としての博物館、先ほども申し上げた、発見した成果を展示し、それを紹介、情報発信していくようなことにも踏み込んでいくのがよいと考えます。

そうすると、博物館は、やはり常に新しい情報を執拗に紹介することになりますので、これはまだ基本構想や基本計画の段階ではありませんが、将来的な展示の更新性、常に新しい展示を発信できるような展示作りが必要になり、そのための予算というものも必要に応じて確保が必要になってくるのではないかとこのように考えます。

それから、私は、博物館という立場から発言させていただいていますが、「基本的な考え方」から、博物館、美術館それぞれに「使命」等を整理していますが、今回の構成として博物館部門と美術館部門が融合した博物館ということが構想にあるとお見受けいたしました。1つの施設に2つの施設が同居しているというだけでなく、博物館に歴史や文化、芸術、そういったものを融合した先に何が生まれてくるかということ、例えば、地域の歴史や文化を活かして、川崎ならではの文化や芸術の創造を行っていただくか、そうした博物館、美術館を融合した、共通の「使命」や「めざす姿」、「取組」を記していく必要があるのではないかと考えたところです。

そして、これは基本計画の段階になってくるのかもしれませんが、施設全体の共通のテーマ、これまで「都市と人間」というようなテーマでしたが、自然災害が起こったことを踏まえ、さらにこれまでの課題を解決していくとなりますと、例えば「都市と人、自然の共生」等の統一した共通のテーマを立ち上げて、「使命」や「めざす姿」等を位置づけていく方が、より施設全体としてのイメージが固まりやすくなり、めざしていく方向が具体的に伝わってくるのではないかとお見受けした次第です。

様々な点について指摘させていただきましたが、私からの意見とさせていただきます。ありがとうございます。

事務局

西川委員、大変貴重なご意見をありがとうございました。

それでは、続きまして、次第3「新たな博物館、美術館に関する基本的な考え方について」でございます。内容については、事務局からご説明させていただきます。



(次第一三) 「新たな博物館、美術館に関する基本的な考え方」について

事務局

では、改めまして、市民文化振興室植木でございます。それでは次第の3「新たな博物館、美術館に関する基本的な考え方について」、説明を申し上げます。

(【資料2-1】、【資料2-2】について説明)

(次第一四) 意見交換

議題(1)「新たな博物館、美術館の「使命」及び「めざす姿」の草案について」

事務局

続いて、次第の4の(1)「新たな博物館、美術館の「使命」及び「めざす姿」の草案について」、事務局より説明いたします。

(【資料3】について説明)

ただいま事務局から説明がありましたとおり、本市は、資料3の太字の下線部分をポイントとして考えておまして、川崎らしさや人材育成、体験型、誰もが楽しめる環境づくりなどを重要な要素として捉えるとともに、中でも新たなミュージアムを整備するにあたって、東京、横浜にはない川崎らしさを浮かび上がらせていく必要があると考えており、そのために力を入れていくべき点について整理していきたいと考えております。

従いまして、ただいま説明がありました「使命」や「めざす姿」に対しての率直なご意見のほか、委員の皆様が感じていらっしゃる川崎の特性や伸ばすべき部分等に基づき、新たなミュージアムで力を入れていくべきことなどについても是非ご意見をいただきたいと思っております。

なお、収蔵品の被災状況や本市の財政状況、立地面の課題などを踏まえますと、新たなミュージアムでやりたいことが何でもできるわけではございません。現在の総花的な内容から、可能であればそぎ落としを行い、新たなミュージアムが真に必要なとする、持つべき核の部分を明らかにしたいと考えておりますので、このような視点からのご意見も伺いたいと思っております。それでは、名簿の順に、稲庭委員からご意見をいただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

稲庭委員

ご説明ありがとうございました。市民や地域と結びついた博物館、美術館が非常に大きなファクターだと思うのですが、これを実現している博物館、美術館が国内にどのくらいあるかという、非常に少ないと思っております。それは何故かという、博物館、美術館側にモノの専門家はいるのですが、「モノと人を結びつける、分か

ち合うことについてどうしたらいいか」を考えられる専門家が少なく、市民への働きかけが少ないからです。やはり、市民や地域と交流の回路をきちんと事業として設計し実現できたら、「市民ミュージアム」という名前にふさわしい活動が実現し、その個性が発揮できるのではと思いました。私は、かつて中世史を、その後は美術史を学びましたので、学生の頃、川崎市市民ミュージアムには歴史資料から美術作品まで多彩な収蔵品があって、さらに「市民」ミュージアムという名前がついていることに当時は衝撃でした。そのDNAを引き継いで「市民」が関わりを持つミュージアムを作っていくときに、人とモノを結びつけることを機能させられる専門の人を入れないと機能しないと思うようになっていきます。国際的な流れとしても、ミュージアム側のモノの専門家としての専門セクターと、市民知というか、民間の知恵とか市民の知恵を対話させ、掛け合わせていく、そういう知の交流と創造のようなことが国際的な潮流としても重要視されています。今までの教育普及的な考え方である、何か専門知を持っている人が市民に教えるということではなく、市民知や民間の知恵と、ある部分の専門知等が交換され、先ほど西川先生もおっしゃっていた新しい共創が起こるようなコミュニケーションデザインが必要だと思うのです。

もう一つが、博物館と美術館のめざす姿をそれぞれ違う内容でご説明いただいたのですが、博物館、美術館に共通するのは基本的にはモノ、「物」です。モノを観察や鑑賞して、そこから学んだり楽しんだりする場所だと思うのです。形のない情報や語りのような展示もあると思いますが、基本的には「モノを観察し、鑑賞してそこから学んだり楽しんだりする」そういう体験ができるのがミュージアムなので、博物館、美術館と分けなくて、モノを観察し、鑑賞し、楽しむということを機能させる統合的なミュージアムができた方が私はよいのではないかと思います。以上です。

事務局

ありがとうございました。それでは、垣内委員お願いいたします。

垣内委員

私は新たな博物館、美術館の「使命」、「めざす姿」についての昨年の議論にも参加させていただいております。その時の他の委員の反応も含めてお話をさせていただきたいと思います。

まず、市民ミュージアム自体は、長い歴史もありますし、市民から寄贈された膨大なコレクションを基に様々な活動をされて、一定の存在感を示していたミュージアムであっただろうという前提のもとに、今回被災したことを、ピンチをチャンスに変えるためにどうしたらよいのかということを議論したと思います。その時、多くの委員のコンセンサスだったのは、今、ミュージアム自体が非常に大きく変わりつつあるという時期になっていること。これまでは1つの場所にコレクション

を集中して、そこできちんと保管し、展示して、人々を寄せてくる、あるいは引き込むというようなビジネスモデルだったわけですが、これだけでいいのかという疑問が出てきたこと。もっと言うと、ミュージアムのミッションはコレクションを大切にすると同時に、ミュージアムの壁を越えて地域、社会に貢献していくということが求められてきている。だからこそ、この時期、もし川崎市がミュージアムを、現在地には再建しないわけですが、何らかの形で再建するのであれば、こういった未来志向型というのでしょうか、今の社会、地域の人たちのニーズをきちんと踏まえたものでなければならないというような議論があったと思います。私自身もそう思っております。

資料3で博物館と美術館を分けて説明がなされていますが、博物館と美術館が融合していた、どこまで融合していたのかという実態については、いろいろ問題もあったかもしれませんが、博物館と美術館の垣根を取り払って、それまでのミュージアムでなかなか引き受けてこなかったような、漫画やフィルム、様々なアイテムをコレクションしてきたのが市民ミュージアムの1つの重要なポイントだと思っておりますので、そういったことを是非継続していった方がよいだろうと思いました。

もう1つ議論になったのは、美術品あるいは作品の価値を維持する、新たに購入する、被災収蔵品のレスキューも含め価値を維持していくということは、ものすごくコストがかかります。当然、人も必要になる中で、市役所だけが税金を投入して運営していくのかというマネジメントの部分に対しても、新しいミュージアムを考えるのであればしっかりと議論する必要があるだろうと思っております。それは、当然のことながら市民の税金だけではなくて、関心を持った人たちの関心をサポートに変えていくような仕組みも必要だと思います。ミュージアムだとどうしても学芸員さんという専門家が必要と言われて、私もそう思いますが、それ以外の多様なマネジメント人材、ファシリテーターや市民とミュージアムをつなぐ人たち等、多様な人々が必要になります。それは、必ずしもミュージアムの専任の職員だけではなく、市民の間にもいろいろな方々がいらっしゃるのです、そういった川崎市民の力を総合して、マネジメントしていくことも重要になるのではないかなと思っております。実際ミュージアムをどういう形で作っていくのか分かりませんが、ハードを作るということになると相当な予算もかかるわけですので、ミュージアムを何のために作るのか、どういう活動をするのかをきちんと議論しておかないといけないと思いました。

また、ミュージアムのあり方が変わるという中で、川崎市市民ミュージアムについては、既に被災したコレクションがたくさんあります。これは、市民の財産でもあるので、被災収蔵品のレスキューは続けて行かなければいけません、このレスキューにも市民の方々の力を借りる。特に、関心のある方々がいらっしゃるはずな

ので、そういった方々の力を借りながらレスキューを継続し、一方で、新たにコレクションを形成していくことに関しては、集中して、リアルで、という事だけではなく、デジタル情報も含めて、分散型でもよいのかという議論もありまして、私自身もそう思っているところがございます。

こういった活動のあり方、ソフトのあり方、それからマネジメント体制が見えてくると、どんな施設が必要なのかということが見えてくると思うのです。リアルで集中型でということであれば、展示室が非常に重要だと思います。大きな展示室も必要になるでしょうし、収蔵庫も必要になってくる。でも、デジタルも含めて分散型ということであれば、このハードのあり方も変わってくるのではないかと思うところです。私自身は、これまでもいろいろ議論に関わってきたものですから、この資料に書かれている内容については、全て同意していますが、ここに書かれていない部分としては、そのマネジメントの問題、それから集中型で行くのか分散型で行くのか、あるいはハイブリットで行くのか等を少し議論していく必要があると思いました。

また、市民の方々の協力を得るということであれば、どういった方々がミュージアムとつながるのか。それはリアルな場所なのか、あるいはバーチャル空間なのか分かりませんが、そういうプラットフォームも必要になってくるだろうと思います。そういったことも含めて今後少し議論をしていき、妥協点が絞り込めればよいなと思っています。今の段階で私からはこのぐらいで、コメントとさせていただきます。

#### 事務局

ありがとうございました。それでは、高野委員お願いいたします。

#### 高野委員

私は、デジタル技術で組織の垣根を越えて情報をつなぐということを1つのテーマに掲げているのですが、文化遺産オンラインでも、実際1,000館くらいの博物館、美術館のモノを1つのデータベースに入れて眺めるとどう見えるかという挑戦をしています。当然、博物館と美術館には文書資料もあり、大学のコレクションなどからはさらに多様な情報も入ってくるということになります。博物館、美術館プロパーの方からすると、そんな「ごった煮」みたいなものを見せられてもびんとこないとか、様々な批判はあるのですが、そういう「1回混ぜてみること」の面白さは間違いなくあります。例えば本とつなぎたくなったり、開催中の展覧会とつないでみたり、僕たちの想像力が掻き立てられて工夫が生まれてくるのです。

ずいぶん前、川崎市市民ミュージアムの名前を初めて聞いた時に、日本にも公立施設で「ミュージアム」を謳っているところがあるのだと感心しました。英語でミュージアムといえば、博物館も美術館も全部ミュージアムです。日本がなんとなく舶来の概念を輸入する過程で、あるものは博物館という名前に落ち着き、あるもの

は美術館、あるものはギャラリーと分化したのだと思うのですが、基本的な「ミュージアム」という活動は1つのものなのではないかと思うわけです。川崎市はそれを無意識的にか意識的にか、最初から選びとって川崎市市民ミュージアムとして、市民が望むものをそれほど区別なく全部入れて眺めてみようというのが最初の夢だったと思うのです。今、大きなバトンタッチを行う時に、もう一度そこに立ち返って、その意義を問い直すべきだと思うのです。

ですから、今回の資料が「博物館機能はこうで、美術館機能はああで」と分けて書かれているのは、イケてないと思います。問題点の分析の第一段階として分けるというのはよいのですが、それに共通するものは一体何なのか。私たちは共通するところだけを支え、個々の分かれた専門的な点については、国立の立派な博物館や美術館ではできないことを、市民ミュージアムだからこそできる活動として示し、それを全面的に支える。例えば、音楽を作る人にスタジオを提供するとか、ライブ会場を提供するとかは、民謡をやっている人でも、ロックをやっている人でも、高校生が作った新しいバンドでも、全部に役に立つわけです。全部の市民が使ってみたくなるわけです。そういう、ミュージアム活動をやりたい人、例えば展覧会を企画したい人ための1番イケてるファシリティを市が全面的に支援すれば、これは間違いなく日本で1番になると思います。

そこには、当然、デジタル化や電子ミュージアムの発信活動なども含まれるでしょう。例えば、メトロポリタン美術館などの海外の美術館では、電子ミュージアムをどんどん発信しています。発信されているデータは誰でも利用可能で、それらをまるで自分のコレクションのように扱って、自分だけの展覧会も企画可能になっています。川崎市市民ミュージアムでもこのよう活動を支援できれば素晴らしいと思います。自分たちでデジタル化を行うためのラボや、デジタルとリアルを自在に組み合わせる展覧会を開催できるファシリティを、スタジオのように市の中にいろんな形に作っていく。そんなことが実現すると面白いなど。期待しています。

事務局

ありがとうございました。それでは、田中委員お願いいたします。

田中委員

田中です。どのあたりから話をしようかと考えていたのですが、先ほどのご説明で草案の総花的な内容から削ぎ落とし、川崎がやるべき事を研ぎすますための議論をしたいとおっしゃっていたので、それを頭に置いて発言したいと思います。

また、高野委員が、全体としてやるべきことを全部引き受けるのではなくて、すでにあるものがあって、残りの部分を補完することによって、すでにあるものと、新たに提供するものが足し合わされ、全体の機能を満たすものでなければならぬという趣旨を発言されましたが、そういう視点も大事だと考えて発言をしたいと思います。

とかくこの種の議論をすると、「新しく作るのでしっかりしたものを作りましょう」、「川崎市は150万人の人口を超える大きな政令市であるので、それにふさわしいものを作ろう」という話が必ず出てきます。しかし、今回、こういう機会なので川崎市市民ミュージアムが置かれていた環境、あるいは成し遂げたこと、あるいは成し遂げられなかったこと、あるいは川崎市の成り立ちの中で極めて特徴的なところに、もう少し自覚的になる必要があると思います。これは、良い悪いは別にして、私は、川崎に長く住んでいて、かつては、幸区に住んでいて、現在は、多摩区に住んでいるのでよく思うのですが、川崎市には「〇〇センター」という名前で、市に一つだけ設けた施設がたくさんあります。それは、近くに住む市民は非常に親しみ深くてよく利用しますが、遠方に住む市民には非常に縁遠い。自分の関心の領域が近い遠いというよりは、川崎市が非常に細長い地形特性を持っていて、東京と横浜に挟まれていて、鉄道網は放射的に広がるかたちで首都圏を形成しているという事実があり、どうしても仕方がないものです。自治体としては、行政区の中で市に一つだけの施設を作っていく際に、単一の施設で全てをカバーしようとする、どうしても先ほどのような地理空間的な制約が紐付いてきてしまうようになる。ただ合わせて考えなければならないのは、東京首都圏という、世界的に見ても非常に大きな都市の塊がそこにあるわけで、その領域内に多数のミュージアムがあって、世界的に見てもクオリティの高い展覧会活動を呈している、川崎市内において設置される施設のあり方を考えるときに、それがその中の多数の一つとして、相互補完的なものとして受容されるのだと、いうことを考えなければならないと思います。ですから、サービスを利用する側から見ると、川崎市域の部分だけを取り出して受容されることがないので、全体の中でそういうことが起こるので、川崎市域の中で、川崎市が主体となって設置するミュージアムがどういうポジションを取っていくのかという事はかなり自覚的にやる必要があると思います。このことは、後ほども取り上げたいのですが、垣内委員がおっしゃっていた「集中」、「分散」という議論とつながるのだと思います。

それから、とても残念なことです、今回台風によって被災して大きくダメージを受けた博物館、美術館の再建、再興の試みの中で議論されていますが、このようなプロセスを経ているというのは、やはりとても大事なことだと思います。博物館、美術館は過去に作られた事物をそこに収蔵しているので、それを見ることによって私たちが過去に起こった出来事と向かい合う機会を与えられるわけです。これは時によっては非常に輝かしい歴史を背負っていく事物と向かい合う場合もあるわけですが、場合によっては災いというか、それによってコミュニティが深く傷ついたり、場合によってはコミュニティが何か乗り越えなければいけない課題を与えられたという、過去の出来事や歴史というものに紐づいている事物というものもあり、それに触れる機会を与えられる場合もあるということです。こういうもの

と向かい合うミュージアムとして、もう少し自覚的であるべきです。今回は、水害だったわけですが、川崎のまちはもともと水害も多かったはずなのです。だから、川崎市の地域史の本を読むと必ず水害の歴史が出てきて、その後に暴れ川の多摩川の話が出てきて、昭和の初めの頃の築堤運動の話も必ず出てくるわけです。どうやら、私たちはそれらを忘却してしまっていたらしい。今回、被災収蔵品のレスキューに関わる皆様は本当に大変だったと思いますが、傷ついた痕跡があって、それを乗り越えてミュージアムを作るということから、何を作り出そうとするのかというのをしっかり考える必要があると思います。最初に述べたこととも関連するのですが、東京と横浜に挟まれている川崎市の地域特性があって、近代においては、工業都市として成り立ちが支えられているという都市の特性があるとすると、そういう意味で近代にどう眼差しを注いで、それに近い歴史に対して、私たちがどういう記録や、そこに残っている事物との対話であったり、学びをどう浮かび上がらせられるのかということ、もう少し考えたほうがよいと思います。そうすると、例えば一般的に言うと、過去の災いの歴史、公害等も含めてですが、そのような地域の特徴的な事柄をどのように扱うのかという視点も大事だと思います。また、将来の土地利用などの転換の中で起こってくることとして、ブラウンフィールドの再生などのテーマも浮上してくると思います。海外に眼を向けてみれば、例えば、ロンドンにあるテート・モダンも、もともと発電所だった建物を改装して現代美術館にしています。ハドソン川流域にあるディア・ビーコンも、巨大な工場をミュージアム、美術館に改装しています。身近なところでいうと、マンハッタンの対面、クイーンズというところにある PS 1 という、今は MOMA の傘下に入っていますが、かつて地域の公立学校だった施設を改修した施設もあります。

ですから、新しく全部作るのではなくて、先行存在として近代の中で何かの痕跡を持って残っている事物をどう利用して未来につなげていくのか、という視点もしっかり持ったほうがよいと思いました。

少し話題を変えてあと一つ申し上げると、私は、川崎市の北部にいますので、生田緑地が比較的身近にあって、そこに4つのミュージアムがあります。例えば、岡本太郎美術館は、岡本太郎の作品だけではなくて、岡本太郎という人物の持っているスピリットを見ることによって、現代と接続できるわけです。例えば、青少年科学館に入っているメガスターだって、ああいうクレイジーサイエンティスティックな事物、発明物があるからこそ、それによって未来を見ることが出来るわけです。日本民家園しかり、藤子・F・不二雄ミュージアムしかり。ですから、そういうものが粒のようであって、点在しているというあり方も考えてもよいのではないかと。先ほどから融合化とか集中とか分散とかの話をしてはいますが、これは多分施設自体を融合化するのか集中するのか分割するのかということなのかと思うのです。しかし、先ほどの議論を聞いていて思ったのは、例えば、「人とつなぐ」みたいな話が話題に

なっていますが、施設というよりは、そこで提供されるサービスが重要になると思うのです。

「MaaS」っていう言葉があります。これは、もともとモビリティ・アズ・ア・サービスの略ですが、そのモビリティをミュージアムに置き換えてみればミュージアム・アズ・ア・サービスというあり方を考えてみることもできるのではと思います。サービスとして市民ミュージアムがどういうものが提供できるか、そのサービスがどういう場所でどう提供されるかという、総体を考えるわけです。総体が提供されれば、それぞれは核となる大きい施設がなくても、もう少し身近な場所でも提供できるかもしれませんし、もう少し柔軟に考えていくことができる。その部分を取り出すとすごくいびつな形になるかもしれませんが、川崎のまちに落とし込んで入れ込んだ時に、全体としてうまく機能していくというか、そういうのも考えることができるのではないかと思います。

事務局

ありがとうございました。それでは、八木橋委員お願いいたします。

八木橋委員

いろいろなお話が出てまいりまして、博物館、美術館のあり方、あるいはサービス面について、これは全体像として十分に検討がなされた上で構成が決まっていくのだろうなと思っております。同じことをお話ししても何ですので、私が少し気になっていたピンポイントな話を、いくつか今日は情報発信させていただきたいなと思っております。

多くの先生方からも話が出たのですが、被災収蔵品のレスキューの問題。これは文化財の審議会委員としても大変気に病んでいるところなのですが、これは逆手に取るというお話も確か垣内委員からもあったのではないかと思います。あるいは他の先生方からもレスキューの問題のご提示があって、市民参画での対応等の話がありましたが、日本全体で見えていくと、東日本大震災を含め、今回の台風あるいは熊本の地震、私もすぐに熊本へあの後行ったのですが、文化財レスキューがいかに難しいかというのを実感として思っております。とりわけ、紙モノについて、修復不可能になっているものが非常に多くて、平泉の大雨の時も文書関係の資料がほぼ壊滅状態に近いというのがあります。だからといって、事前にデジタルアーカイブ化がなされたわけではない。だからもう現物が失われてしまうわけですよ。その中で救えるものは救っていくということはもうしょうがないのですが、収蔵庫が全部水没したという経験はここしかない、これを発信しない手はないとずっと思っていて、やはり、これは市民参画型で取り組んで、短時間で終わる話ではありませんので、今後の博物館、美術館が、また新しい場が提供されたとしても、継続的に市民共働の中でこういう作業と向き合っていく。さらには、この修復の過程は絶対に全国発信、あるいは世界に発信をするべきだと思っています。これ



は、途中の過程も含めてオープンにしながら、「現在の川崎はこんな状態である」というのを発信すべきだと思っています。その拠点としての市民ミュージアムという位置づけは絶対に必要だと。これからいろいろな天災、災害が起こってくるのではないかと思います。その時もう一つの手引き、マニュアルのようなものを、場合によっては川崎がお手本となって示せるという可能性が非常に大きいと思っています。是非、そうした拠点としてのあり方みたいなものを、このミュージアムの機能の中に是非盛り込んでいただきたいと、文化財関係のことをやりながら考えておりました。

それと同時に、水没前の、いわゆる管理運営体制、今回の中には出ておりませんが、市民ミュージアムの立ち位置みたいなものについて、これは川崎市のものであるということは間違いないのですが、でも、やはり運営主体と教育委員会とのリンクが非常に薄いというのが実感としてあります。特に、市民ミュージアムの中に文化財が多く収蔵されているわけですが、それがダイレクトに教育委員会側から手が出せないといえますか、うまくこれが機能しないことが正直あります。このあたりは、何か一元化できて、使い勝手のよい施設にならないかとすごく思っています。ですから、これはいずれもいろいろな行政の中で問題になるところがたくさんあるのですが、教育委員会部局、市長部局との間で壁ができるのではなくて、上手に動けるようなミュージアムにできないかと思っています。そのような壁がなくなるとよいというのが、今回の新しいミュージアムに期待しているところです。

それと、個別の話なのですが、僕も学生時代から市民ミュージアムは面白いと思って注目をしていて、その最大の理由は漫画でした。もう昔なのですが、京都の御池に京都精華大学がマンガミュージアムをつくりました。あれがどのぐらい人を集めているか皆様ご存知であろうかと思います。海外の人を始め、漫画という文化がワールドワイドに人を集める、集客力のある素材であるという事は誰しも認めるところでして、こんなすごい財産を持っていて、これを発信しないのが本当にもったいないといつも思ってきました。若い方のご意見、今日の資料の中を見ても漫画であったり、写真であったりとか、先ほど垣内委員からもお話がありましたが、これは重要なコレクションなのです。ただ、紙モノが今回の台風で被災しました。どうやってこの漫画を拠点にして新しい試みをやっていくか。京都とどうやって差別化するか。そんな戦略がうまくいったならば、観光の命題も含めてこのミュージアムが成功するだろうと。やはり、若い人たちの目を向けるためには、漫画やフィルムが絶対に重要だと思います。今回、写真フィルムの修復の状況について、私も少し関心があったので見せていただいたのですが、水に浸かってしまうと、写真の定着液が剥がれて、束になっていたらくっついてしまうのです。私も写真をやってきまして、自分で紙焼きもやっていたのでわかるのですが、これは復元がほとんど不可能で、でも、ネガで残っているもの等についてはもう一度きれいにし直

すとか、何らかの工夫を持って、この映像と漫画ですか。この辺は若い人の共感を生んで、何度でもここに来て、ここで何かやろうというようなことができる。先ほどの高野先生のお話ではないですが、場としてそこに意味が持てる、みんなが繰り返し来られるミュージアムに是非なあってほしいと。1回行ったら終わりということではない、集合コミュニティの拠点みたいな形で機能してくれたらよいというイメージをすごく持っています。

ただ、先ほども話があったのですが、予算もありますいろいろな意味で制約があるわけですが、やりたいことは全部やれるわけではないというのはおっしゃるとおりでして、その中でやはり川崎に特化して、「よいものができたね」と言えるような施設になりたい。「結局こんなものができたんだね」ではなくて、新しいこととしてこういう新機軸が盛り込まれているというのが見える形で出てくるとよいと思っています。非常に抽象的であり役に立つ話でもないのですが、気になっていることが3点ばかりあったものですから、今日はその点についてだけお話をさせていただきます。

事務局

ありがとうございました。それでは、齋藤委員お願いします。

齋藤委員

先ほど委員の皆様のお話を聞きまして、1点懸念として思ったのが、交流に関してもう少し具体性を持って考えていくのが大事ではないかと。川崎には市民主体の自然調査団があるので、成功事例としてそこを参考にして、交流に関してもっと噛み砕いていくのがよいと思いました。また、市民目線として、先ほど漫画の話が出ていましたが、昨今では私も少し携わっているウェブ漫画等が出てきています。今ここで作成したものも大事なのですが、10年後、50年後の姿として、制約されることがすごく大事だと思っているので、紙とかウェブとか、そういう媒体に制約されないということをすごく大事にしてほしいなと思いました。

また、「使命」に関して、これも学びの機会を大事にしてほしいなと思ひまして。多摩区民としての意見なのですが、先日青少年科学館を訪れた際に化石について興味を持ちました。そういうのって発見することがすごく大事だなと思ったので、発見する場があるということが、多摩区民として恵まれていると思うのですが、それをもう少し市民レベル、川崎市レベルで広げてみた時に何が必要なのかを、もう少し具体性を持たせられたらすごくよいと思いました。年齢に制限なく、小さい子から私のような方までという感じで、それも制約されることが大事かなと思って。

全体的にはそういう感じですが、交流と、制限なく広げていける施設として、その運用を市民としてはすごく期待するところではあります。以上です。

事務局

ありがとうございました。それでは、保坂委員お願いします。

保坂委員

私は博物館、美術館の融合というのが、資料をいただいた時点では、イメージがなかなかつかないのですが、デジタル化を念頭に置くとイメージが作れるということがお話を伺ってわかりました。デジタル化を進めるのはもちろん必要なことだと考えてはいるのですが、あくまでデジタル化の画面を見て、実物を見たいなと思うところに結びつくとういいます。コロナ禍でデジタル化の取組を行っている美術館をたくさん見ましたが、最終的にはやはりデジタルで見るのと実物を見て思うことは、若干差があるかと思うので、あくまで実物に呼び寄せるためのデジタル化が望ましいと思います。実際にまだ見られるものが残っているものに関しては、そのように活用して欲しいと思います。

また、子供の体験がアンケートでもたくさん上がっていたようですが、これに関してはやはり様々な形で体験が必要だと思っています。ただ、時間があまりない人でもいろいろ体験できるように、子供向けも含めて交流を深めながらじっくり回数を重ねるワークショップなどだけじゃなく、ふらっと来ても何かしら体験が出来るように、例えば、レプリカで何かが触れるとか、そういうのがあるとよいと思います。また、子供の頃のそのような体験は、大きくなっても非常に記憶に残っているものだと思います。それは、小さい頃ここで体験したのだという川崎への愛着にも結びつくと思っているので、体験に関しては、その点からも大事だと思っています。

あと1つ、先ほどもお話に出ましたが、川崎は細長い地形で、川崎市市民ミュージアムの現在の立地だと私の家から遠くて、何度か行かせていただいているのですが、身近に感じる事は正直できませんでした。なので、例えば、地域との連携で、まちの史跡でQRコードを読み取ると解説が見られるとか、そういうものがあれば市民ミュージアムが遠くても、身近に感じる事ができるのかなと常日頃から思っています。以上です。

事務局

委員の皆様どうもありがとうございました。まず、今回の「使命」及び「めざす姿」について一通りご意見をいただいたのですが、時間の関係もあり、もう少し言っておきたいところがあればお願いしたいと思うのですがいかがでしょうか。高野委員お願いします。

高野委員

今、国全体のデジタルアーカイブ社会の実現を目指して、内閣府で2017年より「デジタルアーカイブ・ジャパン」というプロジェクトを推進中です（デジタル

アーカイブジャパン推進委員会及び実務者検討委員会) その一環として、NDL (国立国会図書館) が「ジャパンサーチ」というサービスを立ち上げています。それとともに、著作権法が見直され、市場価値を失った書籍については、WEB を使った、コピーサービスをメールや PDF ベースでやってもよいのではないかという議論が進んでいます。これにより、日本一大きい図書館が、外からインターネット経由で使える、「どこでも図書館」のような状況が実現するのです。こういう未来を仮定して、例えば、漫画を考えると、市民ミュージアムの持っている漫画のコレクションを、川崎市が自力でスキャンしなくても、スキャンした情報は外から手に入る。このように、自分たちが所蔵する現物資料について、それらをデジタル化した情報が割と容易に入手できるようになりそうです。そういう近未来の情報環境の中で、皆さんにとっての市民ミュージアムの機能を社会に提供していくことを考えなければなりません。展覧会を市民が自分たちで企画して開こうと思った時に、それを支える仕掛けが生活圏に近いところで提供されていて、そこで自作しているいろいろ試して、これはいいぞとなったら大きいホールでより多くの人に見てもらえる、あるいは、オンラインで見てもらえる。そういう自分たちの創造活動がミュージアムのコンテンツになる。そういうコンテンツを作る活動を市民ミュージアムが支えている。市民ミュージアムのコレクションは、その素材になり、その素材を市民に対して非常にオープンに提供していただければ理想的です。

現在、既存のミュージアムは、自分たちのコレクションを囲ってしまって、一般の人が借りに行っても滅多なことでは貸してくれません。写真の1枚も使わせてもらえないのが普通です。現物の保全を考えると仕方がなかった面はありますが、デジタル化の進展がこれを大きく変える可能性があります。資料をオープンにすることについて非常に慎重だった文化を、市民ミュージアムがガラッと変えて、市民のクリエイティビティのために提供しますという形になると、川崎市全体がそういう活動のためのスタジオやアトリエに変わっていきます。是非そんな可能性を検討していただければと思います。

他組織でデジタル化されたものをドンドン使おうと言っても、川崎市しか持っていないものについてのデジタル化は進めていただきたいです。一度に全部やろうとすると多額の費用が必要になるということから、じゃあ全部やめましょうという話になりがちです。しかし、市民が本当に使いたいものから、デジタル化の要望があったものから、利用希望者や寄託者が作業してでもデジタル化していくという形に変えることで、少しずつ進むと思います。デジタル化のためのラボをいくつか開設して、「ここでならデジタル化してよいですよ。その代わりに自分たちで作業をしてください」という形にすれば、あまり費用をかけない形でデジタル化が進むと期待できます。

## 事務局

すみません。市民文化振興室の白井です。高野委員に質問したいのですが、市民ミュージアムが被災した時に、映画のフィルムの貴重なものはデジタル化をしました。ただ、やはり高額な費用が必要となりました。また、技術が日々進歩していて、現時点で高額な費用をかけてデジタル化をしても、10年、20年後にはその規格や媒体が変わって、改めてデジタル化しなければならないのではないかと考えています。そのあたりは、どのように考えていけばよいのかというのを教えていただければと思います。

## 高野委員

もちろんそのような危惧はあります。私は、国立映画アーカイブの公開サイト、日本アニメーション映画クラシックスや関東大震災映像デジタルアーカイブなどの構築に関わっていますが、そこでは現在の技術で一番よいものを使って、かなりの費用をかけてデジタル化を行っています。ですが、その基準で何十万本もあるストックを一気に、お金をかけてやる事はないと私も思います。しかし、そういう活動そのものの価値は明らかで、1本でも10本でもやってみることによって、初めて専門家でない人たちにもフィルムのメッセージや価値が伝わるのです。デジタル化したデータがあるから、「こういうことができるのでは」というアイデアが膨らんでくるわけです。ですから、ショーケース的なもので構わないと思うのですが、最も効果的なもの、あるいは、最も貴重だと思われるものからデジタル化を進めてみるというのがよいのではないかと思います。

別の例をご紹介します。法隆寺の金堂壁画は国宝の中でも最も大切な文化財として扱われていましたが、昭和24年に焼失してしまいました。しかし、幸いなことに、昭和10年に文部省の依頼で京都の便利堂という印刷会社が、昭和の大修理前の現状記録のためにガラス原版で写真撮影していたのです。当時の最先端の技術を使って、50センチ角のガラス原版363枚を使って内壁全部を原寸大で記録撮影をしていました。80年後、便利堂の倉庫に保管されていたガラス原版が重要文化財に指定され、文化庁の予算で補修費とスキャンが行われました。そのデータを活用しようということで、私の研究室がオンラインで閲覧できるビューワーを作成しました。白黒画像ですが、焼失前に現地で現物を見ても見えなかった細部まで世界のどこからでも確認できます。印刷目的で撮られたガラス原版が、今の技術で全然違う形で役に立った。昭和10年に精一杯の記録をしたことによって、その時点では想像もできなかった活用が実現したのです。このような未来に宛てた手紙のようなつもりで、将来きっと何かの役に立つと信じてデジタル化を進めるべきだと思うのです。

「将来のためにデジタル化しました、現在は何の役に立つかわかりません」と言

うと、なかなか説得力がありませんが、「今度の展覧会で役に立てたいのでデジタル化します。市民ミュージアムの展覧会用に制作した作品については、そこで中間的に作られたものも全てデジタル化して、川崎の宝にして保管していきます」という活動を進めていくと有効だと思います。

事務局

ありがとうございました。せっかくの機会なので述べさせていただければと思うのですが、市民ミュージアムに指定管理者制度を導入したばかりの頃は、地域の文化団体等の方とお話をして、市民ミュージアムの取組があまり褒められたことがありませんでした。台風による被災を受けて、大学の先生方や他の美術館の方々と様々なお話をさせていただくと、今日もそうですが、市民ミュージアムはすごく良い取組をしていたと褒められる言葉が多くて、やはり、市民の方と専門家目線で見ると取組は、多分ギャップがあるのではないかなと感じています。

稲庭委員がおっしゃっていただいたような、モノと人を結びつける人材が必要であるというお話を伺って、確かにそのとおりだと思ひまして、人を育てる人がいないというのをどうするのか、今後基本構想、基本計画を検討していきますが、それを実行する人たちをどうするのかということを考えながらやっていかなければならないなと思ひました。ただ、今日おっしゃっていただいたお話は、本当に頷く部分も多々ありましたので、田中委員からも川崎らしさ、川崎の成り立ちを自覚すべきというご意見も伺いました。確かにそのあたりの視点が抜けていたかもしれないなという思ひもございますので、資料を修正して改めてお示しできればと考えております。まだ終わったわけではございませんが、貴重なご意見ありがとうございました。

## 議題（２）「新たな博物館、美術館の「融合」について」

事務局

様々なご意見があり参考になる部分が多かったので、これを基に「使命」と「めざす姿」を引き続き整理してまいりたいと思ひます。また、様々なご意見もお聞きしたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

それでは、次のテーマ、「融合」について、いろんなご意見をいただいているところなのですが、美術館、博物館の融合といっても非常に難しいところにして、今までの市民ミュージアムが融合といえれば融合なのではないかと思ひますし、例えば同じ建物の中に博物館、美術館があるだけでも融合じゃないかという指摘もございます。その融合のイメージについては、非常に難しいところがございますので、それについて最後にご意見があったらいただきたいと思ひます。どなたかよろしいでしょうか。

## 稲庭委員

本日は欠席されているのですが、佐藤委員が館長を務められている八戸市美術館のリニューアル開館展を拝見しました。そこでは、まさに、美術作品と地域資料が両方展示されていました。市の新しい美術館がオープンするという時、これまでは何か豪華な1点が展示されて、それをみんなで見に行くというようなタイプが多かったと思うのですが、八戸市美術館はそうではなく、地域への視点、地域の記憶ということと、市民参加、美術とそれから民俗学的なもの等、そういうものが融合された内容で非常に関心を持ちました。佐藤委員が建築家であるということもあり、空間デザインの専門家である建築家のチームと一緒に展示を考え、学芸員と建築家が共創して資料やコレクションを展示されていたところが新しさがありました。資料をどういう視点で見せるかということディスカッションしていくことで、博物館や美術館の境がなくなるのではないかと思います。

例えば、東京都美術館で「お弁当展」という展覧会を企画した事があります。お弁当というテーマで、江戸時代からのお弁当文化にまつわる、漆の食器や屏風などから、世界のお弁当箱、そして食をアートとして扱うオランダの現代アーティストには、食をテーマにした新作のインスタレーションを提案してもらいました。その作品にはSDGsの理解が深まるようなアイデアが含まれ、水資源や食の資源について考えさせる作品になっていました。つまり、テーマの立て方で、博物館的なものと美術館的なものはつながりを持って展示することも可能で、博物と美術が一緒になるという事は可能なのではないかと思います。以上です。

## 事務局

ありがとうございました。他にどなたかご発言お願いしたいと思いますが。

## 田中委員

融合化については、おそらく施設の融合化という話と機能の融合化の話と両方あると思うのです。施設を融合化して、何か中心的なものを作っていくという方向がよいのかどうかは、先ほど述べたとおりです。機能の融合化は、稲庭委員がおっしゃっていたように多分様々な可能性が秘められていると思います。非常に有能なアーティストの方は、その場所の持っている特性とか、過去から引き継がれているものをどう未来に接続していけばよいのかといったことについて、非常に高い創造性を持っているのです。そのような、作品に触れる、創作活動に触れるようなことが非常に大事なのではないかなと思います。だからそれは、どういう機能を提供するのか、どういうサービスを追求するのかということ位置づけていけば、自ずと可能性が見えてくるのではないかなと。だから、「コミュニティ・エンゲージメント」という言い方をしていますが、各々の地域ごとに、アーティストがしっかりと関わりを持って活動を展開していくような方向性が重要だと思います。川崎の場合は非常に地理的にも細長くて、コミュニティ構造的にも、各場所にいろんな

リソースがあった歴史があるので、各々の場所ごとにふさわしい形で展開していく。そういう波紋の重なり合わせみたいなものが総体のサービスとして、市民ミュージアムとして提供するサービスとなると良いだろうと思います。先ほど造語として発言させていただいた Maas、ミュージアム・アズ・ア・サービスとしての市民ミュージアムのあり方というのは市域全域を覆うものだと考えると、多分それにふさわしいベースステーションたる施設をどのように置いて、どのように議論に組み込んでいくのかというもよいかと思います。

残念ながら被災してしまった市民ミュージアムは、「よい美術館を建てるのであれば、ちょっと立地が悪くて駅から遠くてもよい」というような、一時期に影響力のあった考え方で立地等が設定されたのかと推察しますが、最近は都心の立地のよいところに美術館を作るというトレンドに戻ってきているので、やはりそういうサービスをちゃんと提供するための立地選定への意識があるのではないかと思います。アクセスのよいところで、日常の側にクリエイティブなものがあるというのは、地域コミュニティにとっても重要なことだと思います。そういうことを考えていただければと思います。

事務局

ありがとうございました。他にありますでしょうか。

八木橋委員

参考にも何にもならない話なのですが、民俗学的にこの融合みたいなことを考えると、もともと古民家であったりとか古い旅館であったりとか、当たり前の世界じゃないかと正直思うこともたくさんあります。行った瞬間に「ここは博物館で美術館だよね」と思える施設はいっぱいある。これを新しい施設で作るというのはもともとハードルが高いと思うのですが、そういう空間的な配置みたいなものはいくらでも融合性というか可能なのではないかと考えている部分があります。工夫次第でやりようはいくらでもあるのだらうなと思います。日本式のものの中に入れて込んでいくのだったら、例えば、町田市にある武相荘は博物館化し、美術館化している。だから、そのあたりの仕掛けを少しやってみたらいくらでもできるのではないかと思います。以上です。

事務局

ありがとうございました。他に何かございますでしょうか。よろしいですか。時間が迫ってまいりましたので、全体を通じて何かご意見、ご質問がありましたら、ご発言いただけますでしょうか。

ご意見も出尽くしたようですので、終了とさせていただきたいと思います。それでは、次第5のその他ですが、最後に事務局から何かありますでしょうか。



## (次第一5) その他

事務局

簡単に事務連絡をさせていただきます。まず、次回の懇談会の日程について、まだ明確な時期をお示しできないところで申し訳ないのですが、夏頃のどこかで開催したいと考えております。お日にちの目途がつきましたら、事前に日程調整をお願いさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

もう一点でございますが、冒頭にご案内させていただきました会議録の件なのですが、会議録を作りましたら、各委員の皆様へメールでお送りさせていただきまして、ご確認いただいた上で確定したものを市のホームページ等でも掲載したいと考えております。ご協力のほど、どうぞよろしくお願ひいたします。以上でございます。

中村局長

長時間にわたり議論いただきありがとうございました。「基本的な考え方」という形で昨年度の到達点があつて、それを基に本日様々なたたき台を整理してまいりましたが、なかなか懇談会形式ですと相互トークのような形にはならなかったわけでございますが、結果として、委員の皆様から私たちの気づきとなるようなヒントとなるたくさんのお言葉をいただいたと思っています。議論の中でもございましたが、私たちが政令市、150万人都市である川崎市にふさわしいのは、立派なホワイトキューブがあつてとか、フルスペックの博物館ということではないという事は感じておりましたし、これからの時代の変化にふさわしい新しい価値を生み出す空間として、結果として施設の融合化ですが、その前に今日議論の中でもあつた機能としての融合化、何をコンセプトとして川崎らしさなのかということはずっと考えていました。別に東京、横浜にあるものであればそっちに行ってください、デジタルで見ればよいものはデジタルで見ればよいですという中で、あえてサイトスペシフィックな川崎らしい機能の満たし方、それにふさわしい施設の形みたいなことを、あるいは人のあり方も議論していきたいと思っています。そういう意味では、委員の皆様が集まっていただいて、これからの議論の参考になる様々なご意見をいただいて、すごくよかったなと思つてございます。是非、最後まで川崎らしさにこだわりながら、大げさかも知れませんが、これからの新しい時代を切り開くような、新しい価値の創造発信拠点みたいなところを目指して議論を進めていきたいと思つたしますので、今後ともご議論やアドバイスをいただければと思います。

## (次第一6) 閉会

事務局

それでは、以上をもちまして第1回新たな博物館、美術館に関する基本構想懇談

会を閉会とさせていただきます。皆様本日はお忙しいところご出席いただきましてどうもありがとうございました。